

T. S. エリオットにおける原罪の問題

亀岡, 浩一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

119

(開始ページ / Start Page)

113

(終了ページ / End Page)

125

(発行年 / Year)

2002-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004839>

T. S. エリオットにおける原罪の問題

亀岡浩一

1

エリオットの思想形成にはダンテが深く関わっていることは、エリオット自身の著作から明らかであるが、例えばダンテの『神曲』の構成や作品世界の展開といった文学的技法は、エリオットの場合、特に詩の創作面においては、初期作品にその影響が強く現われている。エリオットは、現代という時代における文学思潮として、ダンテ的な文学の世界を再構築させようとしたのである。文学作品としての枠組みの中で、それを側面から支えたものは、主たるところとしては、パウンド (Ezra Pound) の詩才であり、またボードレール (Charles Baudelaire) やラフォルグ (Jules Laforgue) らの象徴派詩人の文学でもあった。同様に、エリオットの特に初期の詩作品に関して、一連の作品世界には、ほぼ共通してヒューム (Thomas Ernest Hulme) の価値観に影響を受けて詩的着想を得たと思われる箇所がある。飽くまでも詩的着想であって、創作の過程でヒュームの哲学に直接的に影響された程ではないにしても、エリオットの初期の詩作品は、ヒュームの哲理によってある程度裏付けされる。

ヒュームは、第一次世界大戦で英国歩兵隊に入隊し大戦末期になると英国海軍砲兵隊に所属し、従軍中に不幸にも砲弾の破片を全身に浴びて 34 歳で戦死した。そのため、統一されたものとしての明確な思想体系を残すまでには至っていないが、ヒュームの思想は、概して、人間中心主義の態度に立ち向かい、むしろ古典主義の態度に基づく倫理観によって支えられている。

More particularly, I [Hulme] am concerned with two opposed conceptions of the nature of man, which in reality lie at the root of our more concrete beliefs—the Religious and the Humanist. ... I am not, however, concerned so much with religion, as with the attitude, the “way

of thinking," the categories, from which a religion springs, and which often survive it. ...

A. — The Religious attitude: (1) Its first postulate is the impossibility I discussed earlier, of expressing the absolute values of religion and ethics in terms of the essentially relative categories of life. ... Ethical values are *not* relative to human desires and feelings, but absolute and objective. ... Religion supplements this... by its conception of *Perfection*.

(2) In the light of these absolute values, man himself is judged to be essentially limited and imperfect. He is endowed with Original Sin. While he can occasionally accomplish acts which partake of perfection, he can never himself *be* perfect.⁽¹⁾

ヒュームは、ルネサンス以降のヨーロッパに台頭し始めた人間中心主義の思想を、性悪説を支持する立場から痛烈に批判し、神と人間との絶対的な相違の概念が崩壊したロマン主義に反対の立場を示した。ヒュームは、本来非人間的なものである「完全性」が人間的な関係の中に持ち込まれ、その結果として、神の領域と人間的な領域とを明確に区別していた非連続の意識が、ロマン主義によって曖昧なものにされたことを非難するのである⁽²⁾。つまりヒュームは、ルネサンス以降のあらゆる概念は、人間中心主義に則っていると主張するのである。その意識下においては、人間の有限性も神的な永遠性の中に飲み込まれてしまい、人間の本来的な有限性は神性と同化され、その区分が混同される。有限と無限の混同されたロマン主義的世界観の下において人間は進化を続け、人間は、完全なるものへと到達し得る性質を備えていると見なされるのであり、そして遂には完全なるものへと仕上げられるのである。こうした一種の進歩の概念が、ロマン主義の拠り所となっている。この点にヒュームは、徹底的に糾弾されるべき人間中心主義の誤謬を見て取っているのである。ヒュームにとってロマン主義は、人間中心主義のいわば墮落した態度であった。

Such humanism could have no permanence; however heroic at the start, it was bound sooner or later to end in Rousseau. There is the parallel development in art. Just as humanism leads to Rousseau so

Michael Angelo leads to Greuze.

There are people who, disgusted with romanticism, wish for us to go back to the classical period, or who, like Nietzsche, wish us to admire the Renaissance. But such partial reactions will always fail, for they are only half measures — it is no good returning to humanism, for that will itself degenerate into romanticism.⁽³⁾

ヒュームの見解には、いささか独断的と思われる部分がないわけではないが、ヒュームが一貫して非難する人間中心主義の思想に相対する態度は、取りも直さず宗教的態度である。ヒュームのロマン主義に対する批判の根本的な理由は、中世の教会に一致を見た世界観に基づく正統的で古典的な倫理的価値に裏付けられた絶対価値が、ルネサンス以降に歪められた相対性を伴う倫理的価値に取って代わったという点にある。ヒュームは、そのような時代において宗教倫理の回復を、古典主義を提唱することによって目指したといえる。そしてヒュームにとっての正統的な倫理の絶対価値は、ロマン主義的態度に対峙するものとしての宗教的態度の中に存在する。この宗教的態度は、人間中心主義をヒュームが非難する際に強く意識した態度であり、抽象的な諸概念の価値判断の基準になっている。従って、ヒュームが宗教的態度の重要性を説く場合、古典主義や中世主義への単なる復古を意図したのではなく、ヒュームは、宗教倫理に基づく絶対価値が、まさしく原罪の観念を再認識する態度の中に存在していることを確信しているのである。

ヒュームは、原罪の観念に関して宗教的態度を教義^{ドグマ}と結び付けて論じる場合に、この「態度」というものの性質を詳細に説明しようと試みて、一般的に支持されている「原理」が、実は虚偽であるという観点に立って持論を展開していく。まずヒュームは、抽象的な諸概念を種々のカテゴリーに独自に分類し、究極的価値の点では宗教的概念が正当であることを論証する。ヒュームが主張する正当性は、ルネサンス以降の進歩の概念に侵された信仰によって副次的な性質へと後退したが、ヒュームは原罪の教義を冷静に直視することで、その回復を図ろうとするのである。

What is important, is what nobody seems to realise — the dogmas like that of Original Sin, which are the closest expression of the categories

of the religious attitude. That man is in no sense perfect, but a wretched creature, who can yet apprehend perfection. ... Very few since the Renaissance have really understood the dogma, certainly very few inside the Churches of recent years.⁽⁴⁾

ヒュームの原罪の教義に関する一連の見解は、贖罪に関する問題が扱われていない点で神学的見地からすれば、不完全なものといわざるを得ないであろう。一つの時代思潮としてのロマン主義に対して辛辣な批評を行ったヒュームを、古典主義の信奉者として捉えた場合に、宗教倫理に基づく諸概念と、実在に関してヒュームが指摘する人間中心主義の態度がもたらした諸カテゴリーに分類される諸概念の混同の問題は、本来的に分離されるべき事柄である。しかし、この点に関する明確な言及は行われておらず、ヒュームの見解の中から、思想面での的確な分離の方策を推し量ることは困難であるように思われる。何故なら、ヒュームの攻撃的な論調の趣旨は、主として人間の墮落の観念を再認識することに向けられているからであり、そのため中世主義などは、ロマン主義に対抗するヒュームのいわば基本的な攻撃手段となっているに過ぎないからである。ヒュームが唱える古典主義復興の精神は、人間における神性の完全な否定であって、贖罪の問題を志向する態度とは、根本的に異質のものなのである。

... the modern humanistic view implies that man is either perfectible, or capable of indefinite improvement, because from that point of view the only difference is a difference of degree — so that there is always hope of a higher degree. It is to the immense credit of Hulme that he found out for himself that there is an *absolute* to which Man can *never* attain. For the modern humanist, as for the romantic, 'the problem of evil disappears, the conception of sin disappears.'⁽⁵⁾

ヒュームの哲学と文芸批評の論理は、イマジズム運動という名の下にパウンドらを経てエリオットにも伝わった。このイマジズム運動におけるヒュームの功績の一つは、詩の創作において、事物を視覚的に捉えることの価値を持ち込んだことにあるのではなからうか。その意味でエリオットの「客観的相関物」の理論は、ヒュームの文学理論の流れを発展させたものでもある。エリオット

のヒュームに対する言及は、いずれもヒュームを高く評価するものばかりである。文学理論に限らず、エリオットの言及からも窺えるように、ヒュームの宗教的態度に対する見解とキリスト教の教義に関するエリオットの見解との間には、相当な類似性が見られる。宗教観だけでなく、エリオットの歴史認識や社会秩序に関する見解などは、一部でヒュームを彷彿とさせるところがある。エリオットとヒュームの相違は、ヒュームが原罪説を拠り所として人間中心主義を糾弾したのに対して、エリオットは、原罪の教義をアングロ・カトリシズムの立場から考察し、墮落の観念を贖罪と結び付けて、英国国教会を歴史的かつ社会的視野から考察した点にある。

2

エリオットは、1888年9月にミズーリ州のセント・ルイスに生まれ、1927年6月に英国国教会会員となり11月に帰化し、1965年1月にロンドンで呼吸器疾患のために亡くなった。エリオットは晩年に自分の人生を振り返って、セント・ルイスで過ごした幼い頃の口々と、ヴァレリー・フレッチャー (Valerie Fletcher) と1957年に再婚をしてからの、僅かこの二つの期間だけが自分の人生の幸福な時間であったとバウンドに述べ、また更に、死亡する約一年半前には、ハーバート・リード (Herbert Read) に対し、最良の詩を作るために、実に高価な犠牲を払ったと述べている⁽⁶⁾。セント・ルイス時代以後1957年の再婚に至るまでに、エリオットは、持病のヘルニアや気管支炎などを患いながらも、大学では研究に専念することができ、フェイバー社に移ってからは著作活動に没頭することもできた。また詩劇も成功し、1948年にはノーベル文学賞も受賞した。一見したところでは、エリオットの言葉とは反対に、社会的にはかなり充実した生活を送ってきたような印象を受ける。しかし、エリオットが、エミリー・ヘイル (Emily Hale) と共有した時間を含め、この長い時期に特別な幸福感を感じる事がなく、また、エリオットの言葉を多少割り引いて、かりに充実していたにせよ、生涯の様々な出来事が、エリオットにとって人生の幸福感と直接的に結び付くものでないとしたら、社会的に成功し、文学者として後世に名を残しはしたものの、エリオットの生涯は、エリオット自身にとって、果たして幸福なものだったといえるのであろうか。

エリオットは、いわば人生の明と暗とを同時に見てきたのであり、精神的な

部分においては、常に何らかの苦難を抱いていたように思われる。精神的には決して満たされなかったエリオットにとって、自らの苦悩を癒し、自己を救済する手段として、エリオットは宗教に目を向けた。エリオットは、改宗する直前に、幼い頃の自分を取り囲んでいたユニテリアニズムの宗教的環境やその雰囲気の中からは、自分の信仰心を育むようなものは感じられなかったと述べている。一つの宗派は、いずれも複雑な背景や歴史を持っているが、一般的にユニテリアニズムの特徴として、基本的には大体以下のような内容を挙げることができる。まず神を寛容な存在として捉え、元來人間は、その寛容な神の恵みによって作られた崇高な存在であり、従って人間の理性と良心が尊重され、延いては、三位一体説を認めないとするものである。勿論、信者によっては、独自に修正した解釈を交えて教義を捉え直すことも起こり得る。しかしエリオットにとっては、事業家として成功していく父親や、商業都市へと開拓が進められていくセント・ルイスの社会が目の前の事実であって、人間が生まれながらにして負うとされる原罪の観念を否定し、現実的な繁栄に直結した合理的な家庭の教義は、エリオットの幼心に対し、大人になってから魂の救済をもたらすような正統的なキリスト教としてのイメージを刻みつけておくことは不可能であった。むしろ乳母に連れられて行ったカトリック教会から神秘的な雰囲気を強く感じ、それは強烈な印象を幼いエリオットに残した。また、その後のハーヴァード時代に仏教や東洋哲学に興味を抱いたのは、この幼い頃の体験と相俟って、ユニテリアニズムの雰囲気からは得られなかった神秘的で人間の知恵を超えた何かを、異教の中から見出すことで、内面の精神世界を満たそうとする気持ちだが、無意識的に働いていたためではなからうか。実際にエリオットは、ハーヴァードの学生時代に、東洋思想や東洋の神秘性に強く惹かれていた。そして仏教の根本思想である、一切のとらわれを離れて厳しく公平に現実を見極め、正しい判断と行動を行おうとする、いわゆる不偏中正の精神が、正統性や普遍性を求めるエリオットの内面をいっそう刺激したことは明らかである。しかし、結局エリオットは、西洋人であることを放棄してまで東洋の世界に入り込むには至らなかった。但し結果的に、このような学生時代における学問的環境によって、エリオットは、近代都市へと変貌していく現実の社会の中であってキリスト教信仰に根差して文学の価値を判断する場合に、排他的にはなく、キリスト教から見た異教の宗教思想をも含めた包括的な物の考え方を抱くようになったのである。そして更に、東洋哲学を学ぶことを通して得た包括的な精神をもっ

て、中道主義を標榜する英国国教会を受け入れることは、エリオットにとって、もはや抵抗感を抱くような問題ではなかった。

The Church of England is the creation not of the reign of Henry VIII or of the reign of Edward VI, but of the reign of Elizabeth. The *via media* which is the spirit of Anglicanism was the spirit of Elizabeth in all things; the last of the humble Welsh family of Tudor was the first and most complete incarnation of English policy. The taste or sensibility of Elizabeth, developed by her intuitive knowledge of the right policy for the hour and her ability to choose the right men to carry out that policy, determined the future of the English Church.⁽⁷⁾

エリオットは、このように中道主義をエリザベスの精神と結び付けて考え、更に、エリザベスの教会が、シェイクスピアとジョンソンの時代にふさわしいものであるのならば、それはフッカー（Richard Hooker）とアンドルーズ（Lancelot Andrewes）の功績による部分が大きいという認識に基づいて持論を展開している。エリオットは、英国国教会の制度の基礎を築いた彼ら二人の中に、西洋人としての普遍的で、一切の偏狭を退けた中庸の精神を見出しているのである。エリオットのこのような見解からは、伝統を重視する姿勢とともに、宗教面でも中世の正統的なキリスト教に惹かれつつも、英国国教会に向かっていったエリオットの内面的な精神活動の様子が見て取れる。

英国国教会の歴史をさかのぼってみると、19世紀に入ると、教会に対する考え方の違いから、特に神と個人との関係を尊重し、神の意志は、聖書を通して明らかにされるものであるとして、教会そのものの意義を軽視したロー・チャーチに対抗する形で、オックスフォード運動が起こった。英国国教会も近代化という時代の流れに従って、次第に合理的でプロテスタント的な要素が強くなるにつれ、逆にカトリックの教義を復興させようという動きは、アングロ・カトリシズムとして、英国国教会内の中心的な思想となっていくたのである。エリオットにしてみても、教会生活や sacrament を重んじたエリオットにとって、英国国教会は、すでにエリオットの宗教観にふさわしい存在となっていた。エリオットが正統的なキリスト教を求めて、ローマ・カトリックではなく、アングロ・カトリックに向かったのも、このような事情が背景にあった。エリオッ

トは、ローマ教会の堅苦しい制度よりも、英国国教会の柔軟で包括的な在り方を高く評価しているが、エリオットから見た英国国教会のこのような性質は、微妙な歴史を持った英国国教会の、ある意味では曖昧ともいえる教義から生じた良い成果であると思われる。英国国教会に関して更にエリオットは、

What in England is the right balance between individual liberty and discipline? — between individual responsibility and obedience? — active co-operation and passive reception? And to what extremity are divergences of belief and practice permissible? These are questions which the English mind must always ask; and the answers can only be found, if with hesitation and difficulty, through the English Church.⁽⁸⁾

と述べている。この論述から英国国教会に対して抱くエリオットの心情が窺えると同時に、改宗前にさかのぼって、徐々に英国国教会へと傾倒していくエリオットの教会観の変化の様子が連想される。そしてエリオットは人類全体へと視野を広げて、世界を救う手立ては、キリスト教を信仰する以外には無いとまで確信するに至っている。しかも、エリオットにとってキリスト教は、アングロ・カトリックでなければならなかった。それは、先にも触れたように、ユニテリアニズムという原則としてキリストの神性を否定する教義や、また神の恩恵は、聖書を通して個人の信仰によって実現されるとするような進歩的な考え方に納得がいかなかったばかりか、エリオットは、むしろ教会の一員として、英国国教会に継承されたカトリックの伝統に自分自身を従属させ、教会生活を通して自己の救済が達成されると考えたからに他ならない。エリオットのこの信仰心は、人間の原罪を真に意識するところに起因しているのである。特にエリオットは、この原罪という実に不可思議なものに対して、真正面から深く掘り下げて取り組んでいった人物である。そして原罪の意識と密接な関係にある贖罪の意味と霊的救済の境地を何とか見出せたことは、エリオットにとって幸いなことであった。エリオットは、使徒信条や告解は勿論のこと、マリアと聖者らの祈りを信じ、中でも特に聖体拝領を大変重要視している。エリオットが聖体拝領に重点を置いていた事実は、原罪の意識を考える上で、相当重要な意味を持っているのではなからうか。エリオットにとって、十字架を背負った人

間イエスは、同時に神であらねばならなかった。英国国教会の儀式に打ち込むエリオットの一連の姿勢は、エリオットと教会の関係を物語るものであると同時に、信仰の訓練を重ねていくことで、神との交わりを持つようとしたことを裏付けるものでもある。エリオットは、全身全霊をもってアングロ・カトリックに改宗したのである⁽⁹⁾。

エリオットは、幼い頃から現実的な事柄以上に、神秘的なものに惹かれていたが、詩と神秘主義との間に何らかの関係があることは認めた上で、完成された詩作品そのものを神秘主義に結び付けてその詩の素材を捉えようとするものには、反対の立場をとっている。

There is another danger in the association of poetry with mysticism besides that which I [Eliot] have just mentioned, and that of leading the reader to look in poetry for religious satisfactions. These were dangers for the critic and the reader; there is also a danger for the poet. No one can read Mr. Yeats's *Autobiographies* and his earlier poetry without feeling that the author was trying to get as a poet something like the exaltation to be obtained, I believe, from hashish or nitrous oxide.⁽¹⁰⁾

エリオットは、文学作品である詩の中に、読者に対する詩人の信仰心の伝達手段としての機能を全く見ていないのである。エリオットにとって問題だったことは、改宗後、どうしても意識しないではいられなくなった信仰のテーマを、どのような形で詩の素材として用い、そして更に思想や経験、あるいは感受性とのバランスを保った表現にまで高めるかであった。しかも、キリスト教の伝統的な原罪の観念が薄れ、合理主義的な社会思潮の中であって、また実利的な繁栄が尊ばれた時代を背景として、一教会員の伝道活動的な創作ではなく、飽くまでも広い視野から、詩人として信仰心を扱うこと、ここにエリオットが詩人として自らに課した使命があると思われる。勿論、「伝統と個人の才能」(“Tradition and the Individual Talent”) で述べられているように、詩人の精神と、作品としてそこに表現された精神とは、一線を画して捉えられなければならない。但し、エリオットが個性からの逃避を論じた1919年とほぼ同じ時期に創作が開始された『荒地』(*The Waste Land*)におけるタイリーシア

スの置かれた立場から見れば、「うつろな人々」(“The Hollow Men”)を経て、改宗してからの詩では、作品世界における詩の語り手の感情が前面に押し出されて歌われている。ここにエリオットの詩人としての創作態度の変遷を見て取ることができる。エリオットが初期の詩の作品世界で作りに出した人物は、ブルーロックにしてもゲロンションにしても、非常に面白い性格の持ち主で、作品世界における物語の展開において、ある意味で、時として滑稽であったりもする。しかし、どの人物も、絶対的な権威を備えた神を、あるいは確固たる信仰を持っていない点で共通している。彼らは、あれこれと悩んだり迷ったりしながら堂々巡りを繰り返し、彼らが求める救いには、全く近づけない状態で描かれている。神を持たない彼らには、当然のごとく、贖罪の意識が無いばかりか、むしろ、原罪の問題を克服できないことから生じる悲惨な状況の中で苦悶する以外に、為す術がないのである。エリオットの伝統論からも窺えるように、個性を客観化する際の手段として意識されたものは、いわゆる歴史的意識であるが、改宗してからは、この歴史的意識に加え、いわば宗教的意識が、エリオットの念頭に置かれていたものと思われる。しかし、改宗する前の詩作品に、宗教的意識が働いていないという意味ではなく、例えば『荒地』では、時間の同時性という概念によって客観化されているように、個性の表現の仕方そのものに変化が見られるのである。

その意味では、改宗した直後から書き続けられた『灰の水曜日』(*Ash-Wednesday*)の作品世界における語り手である「私」(“I”)からは、一見どこまでもエリオットの情緒に近いような読後感を抱くにも拘らず、実際のところ、それはエリオットを完全に離れ、普遍性を備えた個性になっているのである。つまり、改宗した1927年から見た詩人としての表現方法の相違は、それ以前の創作技法の屈折した方向転換というよりは、むしろ延長線上にあり、強烈な歴史的意識によって押さえ付けられていたものが、宗教的意識と相俟って解放された結果であると思われる。この解放を可能にしたものの一つに、英国国教会の受肉の教義が考えられる。

3

エリオットの信仰の中心は受肉にあるが、改宗した年に「東方の三博士の旅」(“Journey of the Magi”)と題した詩が発表された。この詩作品は、フェイバー

社より依頼され、クリスマスを意識して書かれたものであり、イエスの誕生に関するエリオットの詩作品として興味深いものである。

この詩の冒頭部分のもとになったアンドルーズの説教は、エリオット自身が評論で引用し、大変高く評価している。

‘It was no summer progress. A cold coming they had of it at this time of the year, just the worst time of the year to take a journey, and specially a long journey in. The ways deep, the weather sharp, the days short, the sun farthest off, *in solstitio brumali*, “the very dead of winter”.’⁽¹⁾

アンドルーズのこの説教を用いて、エリオットは次のように表現した。

‘A cold coming we had of it,
Just the worst time of the year
For a journey, and such a long journey:
The ways deep and the weather sharp,
The very dead of winter.’ (ll. 1-5)

アンドルーズの説教とエリオットの詩作品とを比べてみると、人称代名詞の相違を除けば、使用された単語についての大体の相違は、詩の3行目に見られる。つまり、アンドルーズの説教における“specially”の一語を“such”に置き換えたことである。結果的にエリオットの詩の行から“specially”という3音節語が無くなり、この部分は僅か6箇の2音節語を除けば、全て単音節の単語で構成されている。エリオットのこの詩の静かな淡々としたリズムの中にも、三博士の旅路の様子がよく醸し出されている。文脈の上でも、第一連の後半で語られる博士達の葛藤や様々な試練への伏線を張る意味でも“such”という一語は適した意味を持ち、この詩の独白体の形式からしても、実にふさわしい単語であると思われる。

エリオットは、言葉が一語一語正しく整理され、何らかの意図に基づいて適切に配列されるなら、たとえありふれた単語であっても、その組み合わせによって、全く思いもよらなかった意味が生じることをアンドルーズから学んでおり、

その意味では、この冒頭部分は、まさしくアンドルーズから得た技法の実践でもある。

第二連に移ると、主として聖杯伝説や受難物語、更には黙示録やユダの裏切りなどを暗示する言葉が随所に配置され、聖書の一連の要素が、三博士の旅路の背景と融合して扱われている。

Then at dawn we came down to a temperate valley,
Wet, below the snow line, smelling of vegetation,
With a running stream and a water-mill beating the darkness,
And three trees on the low sky.
And an old white horse galloped away in the meadow.

...

Finding the place; it was (you may say) satisfactory. (ll. 21-25, l. 31)

三博士は、聖杯伝説における騎士達と融合し、イエスの誕生が、人類にとって果たして何を意味するのかという疑問は、作品世界においては、同時に聖杯伝説における聖なる杯と槍の謎に結ばれ、イエスの誕生の瞬間であるにも拘らず、三博士の行く先に広がる光景は、同時にイエスの死の場面と融合している。つまり、三博士が辿り着いた「穏やかな谷間」は、ゴルゴタの丘の変容した姿であり、それは、聖書の物語を彷彿とさせる「三本の木」や「老いた白い馬」などの詩句によって暗示されている。

ベツレヘムにいよいよ到着した三博士の感想は、多くの困難を克服したにも拘らず、第二連の最後でごく簡単に表現されているに過ぎない。しかもそれは、人類の罪を贖うために遣わされた神の一人子の誕生に対する喜びどころか、ただ単に義務を果たしたにすぎないような、冷めた気持ちとして扱われている。このように、アンドルーズの説教に触発されながらも、アンドルーズの説教の目的とは別の観点から描写されている点に、エリオットの創作過程での特質が垣間見られるのである。この詩の最終連の内容によると、三博士は、「イエスの誕生」の意味を「イエスの死」と結び付けて捉えることはせず、むしろ、誕生と死は、相対するものと考えていた。ところが、「イエスの誕生」が「つらく痛烈な苦しみ」(“Hard and bitter agony for us, like Death, our death.”) という表現に結び付けられている点に暗示されるように、イエスの誕生は、原

罪と贖罪の問題に対する認識を抜きにしては、無意味なものになってしまうのである。

原罪の問題に関して、「ランベス会議後の感想」(“Thoughts after Lambeth”)において、エリオットが英国国教会をカトリック教会の一支部、つまりイギリスにおけるカトリック教会と位置付けていることは、少なくともイギリスという一国家において英国国教会は、エリオットの中では、正統的なカトリック教会として認識されていることを裏付けるものである。そして、キリスト教信仰を辛抱強く守るしかないと考えたエリオットの信仰の拠り所は、中世のキリスト教に顕著であったような墮落の観念を前提にして、神と個人の関係を、社会という広い範囲から見つめ直すことによって、贖罪に意識を集中させる点に置かれていたものと思われる。

中世のような時代背景とは異なり、現代の多様化した世界観ないしは価値観の下においては、倫理的規準と神学的規準は、必ずしも一致した状態にあるとはいえない。しかし、エリオットの神学的規準は、原罪の観念に基づいた宗教倫理と密接に結び付くものであって、この宗教倫理を確立していく態度の中に、個人の精神世界の問題である信仰と社会の融和が達成されると考えたのである。

《注》

- (1) T. E. Hulme, “Humanism and the Religious Attitude,” *Speculations: Essays on Humanism and the Philosophy of Art*, ed. Herbert Read (London: Routledge and Kegan Paul, 1924), pp. 46-47.
- (2) *Ibid.*, pp. 3-11.
- (3) *Ibid.*, p. 62.
- (4) *Ibid.*, p. 71.
- (5) T. S. Eliot, “Second Thoughts about Humanism,” *Selected Essays*, 3rd enl. ed. (1951; London: Faber and Faber, 1986), p. 490.
- (6) Cf. Peter Ackroyd, *T. S. Eliot* (London: Hamish Hamilton, 1984), p. 13, p. 334.
- (7) T. S. Eliot, “Lancelot Andrewes,” *Selected Essays*, pp. 341-42.
- (8) T. S. Eliot, “Thoughts after Lambeth,” *Selected Essays*, p. 376.
- (9) エリオットのカトリシズムと教会観については、拙論、「T. S. エリオットのアングロ・カトリシズム」、『紀要』(法政大学教養部, 1997), 第99号, 63-69頁を参照。
- (10) T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (1933; London: Faber and Faber, 1970), p. 140.
- (11) T. S. Eliot, “Lancelot Andrewes,” *Selected Essays*, p. 350.